

葉害 少々大

11) 葉の先端が分れているもの

葉害 中～小

3. 葉害の種類別発生割合

第 2 表

(4区平均値)

葉害 の症状		試験番号											
		1 百合の 根状発 育停止	2 地際より 屈曲して 発育	3 葉緑素 の欠乏	4 葉の肥 大	5 全葉が 線状	6 葉の先端 のみ線 状	7 葉の一部 の変色の 線	8 葉の先端 肥大	9 葉の稔 いもの	10 葉が濃 色状	11 葉の先端 が分れて いるもの	
日	cm	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	
No.1	0	1	38	11	6	—	—	3	—	—	4	38	—
2	0	2	1	35	6	8	2	4	10	1	29	3	1
3	0	3	—	35	3	3	—	—	12	—	45	—	1
4	1	1	10	31	6	—	1	2	9	—	25	13	2
5	1	2	1	39	4	3	2	3	6	1	41	—	—
6	1	3	—	28	1	1	1	—	16	—	52	—	—
7	2	1	24	22	6	3	2	4	6	3	8	20	2
8	2	2	—	38	5	5	3	3	8	—	32	—	—
9	2	3	—	25	—	2	—	—	25	—	43	—	—
10	3	1	44	9	5	—	2	—	5	—	4	31	—
11	3	2	3	31	7	3	3	9	13	—	25	—	1
12	3	3	—	30	2	5	—	—	11	2	45	—	2

第2表に見られるように葉害は11の形態が観察されるが葉害の中では特に9・2・1・7の型のものが多く、その他の種類の葉害の発生は少い。また覆土がうすい場合の葉害の種類は百合根状・屈曲・稔転の型が多かった。

要するに麦の播種にあたり覆土を厚くすることによって撒布後の降雨が何時あっても発芽障害を軽減することが出来る。従って Cl-IPC の播種直後全面土壌処理の場合3cm程度の覆土を行えば安全である。

薬剤によるムギキカラバエの防除

平 尾 重太郎・長谷川 勉

(東北農試栽培第1部) ・ (秋田県農試)

1956年に発見されたムギキカラバエ(*CHLOROPS* sp.)は秋田県の日本海沿いの一帯に分布し、主にコムギを被害するキモグリバエ科害虫の1種である。著者らは本種の生態と防除に関する研究を行っているが、それらの一部はすでに報告した¹⁾。ここでは1957・58年に防除試験の一部として行った散布時期と効果比較試験の結果をとりまとめた。

この試験は秋田県天王経営伝習農場において行ったもので、試験の遂行に御協力を賜った同場須藤技師、秋田農試佐竹義淳氏に厚く御礼を申し上げる。

1. 試 験 方 法

最も効果のある薬剤の散布日を知るために、1958年第1化期成虫の羽化初期に当る5月9日から6月2日まで

3日ごとに産卵数を調べた。調査したのは長さ3mの畦で、数え終った卵はこれをかき落して同一卵を2度数えないようにした。各産卵調査日にはディルドリン4%粉剤を撒布して、産卵消長と防除効果とを比較検討した。さらに、薬剤の効果を比較するためにそれぞれ第1・2化期の産卵最盛期に当る5月21日・9月28日に1回ずつ5種類の粉剤をミゼットダスターを用いて、反当り3kgの割合で散布した。

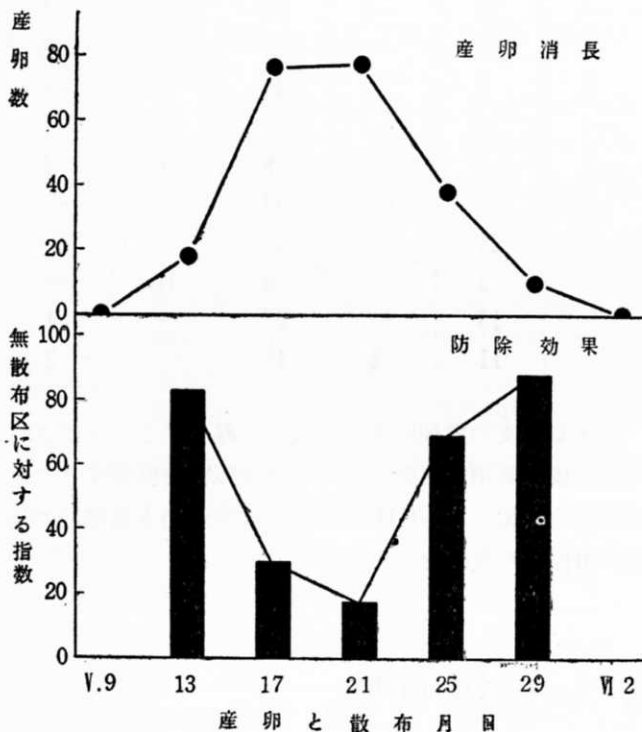
1区は5坪で3区制の乱塊法に配置した。用いたコムギは晩生種の砂系1号で、9月10日に畦巾を60cmとして散播した。その他の耕種法は同場の基準に従った。

2. 結 果 と 考 察

播種後コムギは1週間で発芽し、葉害や他の病害虫の

発生はほとんどなく順調に生育した。一方、ムギカラバエの被害はそれぞれ前年の同化期にくらべて少く、第1化期では被害茎率5%、第2化期では被害株率17%であった。

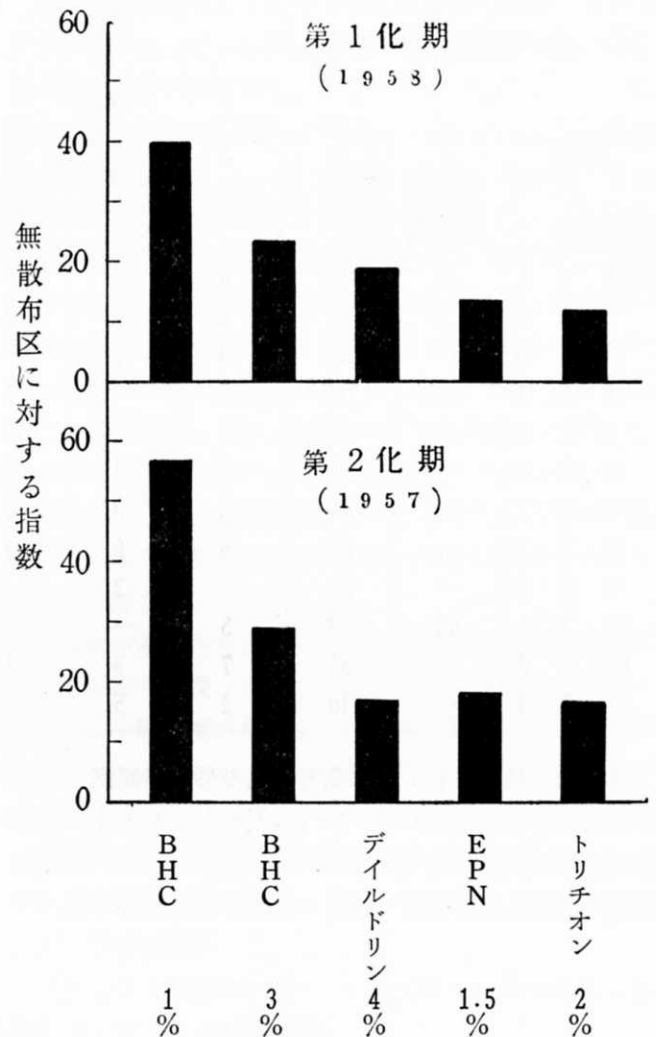
1958年第1化期の産卵は5月初旬に始まって5月末に終り、その盛期は5月4半旬、総産卵数は219個であった。これらの産卵消長と散布日における防除効果との関係を示せば第1図のとおりである。



第1図 産卵消長と散布日別の防除効果
(1958, 第1化期)

第1図によると、産卵が多い日に散布すれば防除効果が大きいことがわかる。特に、産卵最盛日の5月21日の効果が最も大きい。このような結果は本種と同様にキモグリバエ科のイネカラバエではすでに報告され^{2) 3)}、薬剤の効き方は孵化幼虫の食入防止として働くためであるといわれている。

次に、薬剤の種類と防除効果とを示せば第2図のとおりである。供試した薬剤はいずれも被害の発現を抑圧しているが、特に、ディルドリン・EPN・トリチオンで著しく、BHC 3%がこれらに次いでいる。さらに、世代による防除効果を比較すれば、各薬剤とも第1化期での効率が高い。これは発生量の相違によるのか、あるいは散布期におけるコムギの生育の状態の違いによるものか明らかではないが、おそらく後者に基因するものと考察される。この試験では収量調査を行わなかったため、防



第2図 数種粉剤の防除効果

除による経済効果を求めることはできなかったが、この点については被害解析と相まって更に試験したいと考えている。

3. 摘 要

ムギカラバエの防除にはディルドリン・EPN・トリチオン・BHC 3%粉剤を産卵最盛期に1回散布したところ、被害を1/4以下に軽減することができた。

引 用 文 献

- 1) 平尾重太郎・長谷川勉 1958. 応動昆. 2(3): 208~215.
- 2) 湖山利篤他 1956. 北日本農業研究会. 5: 29~40.
- 3) 岡本大二郎 1956. 農及園. 30(1): 215~218.